

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



「比良山古人靈託」解題

184.9
Ke1162h

「比良山古人靈託」解題

一

本書は、延応元年（一二三九）五月九条道家の病い平癒の祈禱に関連して、比良山古人なる靈と、祈禱者慶政との問答を記したものである。

本巻は、卷子本、縦廿八・三糎、上下に各一本界間廿五糎の墨界あり。本文用紙は斐楮交ぜ漉、十五枚、一紙の長さ四十一・五糎前後。一紙に廿一行前後、一行十七字前後。なお、長さ廿五糎の楮紙の表紙を有し、九条道房筆「比良山古人靈託」の外題があり、本文端裏にも、九条兼孝筆と思われる「比良山古人靈託大織冠御親類」がある。本文の書写は南北朝期、首上部破損のため「比良」の二字を欠き「 山古人靈託鎌足御親類」と端作りし、巻末に「比良山古人靈告草案也」とある。

諸本としては、当本の他に、猪熊信男氏と西田長男氏の所蔵本などが知られている。

猪熊本は、卷子本一巻、慶政の後書きに続けて「文亀貳年壬戌十一月十二日右以御本令書写了 祐逸」の奥書

があり、「比良山古人靈告草案也」の文字は見えない。内容は、第三問に対する靈託前半部以前を破損のため欠いているが、当部本（本複製）と細部までほとんど一致する。ただし猪熊本には、各問答毎に番号を朱書し、熟語・固有名詞などに朱びき・振仮名、および人名などに歿年等簡単な註を附している。

西田本は、冊子本一冊、巻末に京城養衛菴北軒如水子（応永廿五年カ）、嘉吉三年相国寺樵隱子・明応七年洛下来子の本奥書を有する近世期写本である。完本で、内容についてはほとんど異なるところはないが、助詞等の省略および云い換えなど細部では若干の差異がある。

この他、高山寺に「比良山之記」と題する元文五年密辨本とある奥書を有するものがあるとのことである。

慶政の前書きによれば、一本を道家に、一本を將軍頼経に進覧したとあり、しかも当部本巻末に「草案」の文字が見えることから、草案本と進覧本（二部）の存在が考えられる。当部本・猪熊本は草案本系に属するものであらう。

なお本巻は、昭和卅一年度に当部で一括購入した九条家本に属するものである。

二

内容は、比良山古人と自称する天狗と慶政との約五十条にわたる問答をまとめたもので、巻首・巻末に本書の著述の経緯を示した慶政の前書き、後書きを載せる。問答は、道家の病氣関係から修善行事の利益、天狗界の様

子、および現世人の消息のおおよそ三つにテーマを別けることができよう。ただしこのテーマは各々入り組んでおり、慶政の前書きにある三度にわたって問答が行なわれたこととは関連しないようである。

先ず、道家の病は、崇徳院・十楽院仁慶・大原僧正承円・桜井法円などの祟りによることを明らかにしている。このうち、崇徳院は保元の乱を起して失敗、長寛二年（一一六四）配所讃岐で崩じており、その怨念を鎮めるため建久二年（一一九一）御陵の辺に一堂を建立しているほどで、仁慶も「帝師護持僧含恨終命」（明月記寛喜元年四月廿三日）と云われたり、「此政之輩皆可滅亡也」（同上文暦元年八月十一日）と云つたと恐れられたり、藻壁門院の死もこの怨霊によるものとされて（五代帝王物語）、当代盛んに怖畏された怨霊である。この他、承久の変で隠岐に流され延応元年二月、配所で憤死された隠岐院（後鳥羽院）の風説なども見える。

また、天狗に関しては、身体・飛行方法・衣服・食事・妻子・生死など詳細にわたっており、十二世紀中葉にこれほど天狗に関して具体的に記している史料は他に例を見ない。ここに述べられる天狗は、丈が低かつたり、鳶に乗って飛行したり、鉄丸を食したりで、必ずしも後代にいたつて定型化する天狗とは一致しないが、史料制約もあつて、こうした民間信仰の研究分野は全く未開拓な状態にあるので本史料の十分な検討が望まれよう。

本書の問答の中で、一番多く費されたのは当時の人々の消息で、これは死者の後生は勿論のこと、実際に政界等に活躍している人々に対する予言も含まれている。このうち予言については、これを実際と較べてみるとほとんど当たっていない。例えば八十余まで生きるとされた良平が、靈告の翌年に死んでいる。また後生の問題につい

ては、話題に上つた死者を見ると、歿年不明の者もあるが、上限は慈恵の寛和元年（九八五）、下限は北白河女院の暦仁元年（一二三八）で本霊託の前年となつており、大体一二二〇～一三〇年代の者が多い。これらを整理すると次のようになる。

現世人に対する予言（『』は霊告、「」は實際）

内裏（四条院）『別事なし』、「延応元年より三年後（以下同じ）の仁治三年に崩御、十二才」

関東（將軍頼経）『別事なし』、「五年後の寛元二年將軍職を辞し、翌年出家、同四年京都に送還される」

入道殿（九条道家）『六月と十月を慎しめば七十才まで生きる』、「建長四年六十才で薨去」

太政入道殿（九条良平）『三年と六年に驚く事があり、八十才まで長生する』、「一年後五十七才で薨去」

猪熊大殿（近衛家実）『近い内に変事がある』、「三年後の仁治三年六十四才で薨去」

撰政岡屋殿（近衛兼経）『短命』、「二十年後の正元元年五十才で薨去」

左大将円明寺殿（一条実経）『短命』、「四十五年後の弘安七年六十二才で薨去」

死者の後生についての霊告

義時朝臣（執権）、二品（北条政子）、後高倉院、後堀河院、北白河女院（藤原陳子）、後京極殿（九条良経）、

解脱房（貞慶）『回答なし』

明恵房（高弁）、御廟僧正慈恵、御室戸隆明『極楽往生など』

月輪殿（九条兼実）、普賢寺入道（藤原基通）、吉水前大僧正（慈円）、藻壁門女院（藤原樽子）、観音院僧正（余慶）、一乗寺増誉『魔界』（他に後白河院、崇徳院、十楽院仁慶など）
故撰政殿（九条教実）、法然房、善念房、性信房『地獄・畜生道など』
この他、修善として経供養、修法としては不動法や五壇法の利益が説かれ、総じて執着心を取り去つた眞実心による行業を強調している。

三

本書の成立の契機となつた道家の疾病と祈禱は、「吾妻鏡」や「門葉記」などに詳しく記されているが、慶政のは私的であつたためかこれらの記録には見えない。ただ「聖一国師年譜」（「東福紀年録」にも同文）には

延應元年己亥（中略）五月藤丞相道家染疾、命諸僧、誦呪以祈保安、二十三日、比良山神託家盛妻、告僧慶政

證月上人、曰藤丞相將痲建寺、復造十三重石塔、憑此善念、夙罪消滅、今後善根、必當清淨、我有三千眷屬、當

爲伽藍神、以致衛護、道家聞乃願心彌堅

とあつて本書の記事と符号する。

道家の東福寺創建の素意は、嘉禎三年（一二三七）九月の「法性寺殿阿彌陀經願文」に窺われるところで、この延応元年の発病に弥々心を固め同年八月に上棟式を行なつてゐる。

靈託は、この道家の祈禱の際、比良山古人が刑部権大輔家盛の妻に憑いたと云つてゐるが、こうした託宣の風は当時極めて盛んであつた。

例えば、建久八年（一一九七）頃、藤原公時の家人、藏人大夫橋兼仲の妻が後白河法皇の託宣を称し処断されたことがあり（皇帝紀抄、愚管抄）、同じ頃、蛇をあやつつて蛇託宣を称する男（明月記建久七年四月十七日）や天狗を祭つたらしい一心房と云う者が話題にのぼつてゐる（和漢合符）。また、建永元年（一二〇六）にも、刑部権大輔源仲国の妻が同じく後白河法皇の託宣と称し御廟建立の事を唱え、妖言と断ぜられ追放されてゐる。しかし、この時は九条良経の頓死などもあり、後白河法皇の寵妃丹後局の取り上げるところとなり、後鳥羽上皇は託宣の真偽を熊野に祈請し糺してゐるほどである。

加えて、天福元年（一二三三）九月、藻壁門院が廿五才で、翌年五月仲恭上皇が十七才で、八月には後堀河院が廿六才でと、いずれも若くして崩御してゐる。更に武家方でも、その十二月三浦義時、翌年正月北条時房と、承久の変関係者が頓死してゐる。そして二月隠岐の配所で後鳥羽院の憤死があり、託宣、妖言がはびこり不安な世情をかもし出している。この頃、鎌倉では天魔蜂起の風説が流れ、連夜放火が頻発、相模守重時宅に天狗が現われたとか、こうした噂が京都にも伝わり、武家滅亡の兆だとささやかれたりしてゐる。（平戸記延応二年二月廿二・廿七日）本書はこうした世相を背景にして成立したものである。

なお、託宣者である比良山神についてみると、比良山は琵琶湖の西岸にそびえる千余米の高山で、湖に沿つて

比叡山の北に連なる。山麓の湖岸、明神崎の近くに比良神社が（白髭神社とも）あり、「延喜式」に志呂志神社と見えるのがこの社で、貞観七年（八六五）従四位下がこの神に贈られてゐる。比良神をめぐる説話としては、石山観音堂を創る奇瑞を示したり（元亨釈書廿八、石山寺縁起）、伝教大師に比叡山の故事を語つたり（古事談五）、山麓の婦人に憑いて僧法勢に観音普門品の説誦を乞ひ（元亨釈書九）、比良神社の称宜の子に靈告を語らせる（北野宮寺縁起）などが知られてゐる。概して云えば、水神としての性格が強いようで、これは琵琶湖と云う大湖をひかえてゐる故であろう。しかし、金峰山や比叡山との関係も窺え、また比良山を修行場とする僧侶の存在も見られ、山獄神的性格も考えることができる。本書の山神を大天狗とするのはこの系統に含まれよう。因みに比良神社の祭神は猿田彦である。

本書の著述の時期は、延応元年二月に崩じた隠岐院の霊が六月に京師に乱入すると云う風説が見え、後生の問題を尋ねた人々の死期が延応元年の前年までであり、予言対象者が延応二年三月に薨じてゐることなど考え合せれば、慶政の記してゐる延応元年五月頃として誤りないものと思われる。

四

慶政は、文治五年（一一八九）誕生^{註1}、その出身については、猪熊本比良山古人靈託の勘註に「證月上人ノ名、^{（道家）}峯殿ノ兄ナリ、孔子取落ニ依テ背骨出ル故ニ釈門ニ入ル、一音院法華山寺字峯ノ堂等ノ祖師」とある。この記事を

信用すれば、九条良経の男、本書に発病祈禱をされている道家の兄に当る。不具の為、早く癡嫡、仏門に入り、そのため九条家の系図等に名をとどめなかつたのかもしれない。現在九条家旧蔵書中に慶政関係の資料がかなり残されているのは、慶政が九条家と密接な関係があつたことを示している。ただしこの勘註は、文亀二年（一五〇二）書写のものに附されているだけで、慶政九条家出自説を直接裏付ける史料は知られていない。

右の説を除くと、慶政の出自に関する史料は全くなく、その上半生の行動も多く不明である。園城寺に入つて能舜、あるいは慶範に師事、一方東寺で行慧から東密を学んだとも云われ、また延朗の弟子ともされている。

建保頃入宋（建保五年一二二七）、福州版「一切経」註²等の經典、仏像類を請来している。山城国西山に草庵を結び、また法隆寺舍利殿の修復などに力をつくし、晩年法華山寺を創立している。文永五年（一二六八）十月六日入寂、年八十才、證（または勝、照）月房と号す。

著書には、「漂到流球國記」（影印）、「法華山寺縁起」、「證月上人渡唐日記」（佚書）などがあり、「閑居の友」の著者にも擬せられている。その他、往生伝、諸寺縁起類等の書写も多く知られている。法友として梅尾の明恵が特に親しく、また九条道家・教実をはじめとして、時の権門たちとの贈答歌も多く、続古今集以下の勅撰集や、秋風・夫木などの私撰集にも入撰歌が見られる。

注¹ 永井義憲氏は、東寺観智院に蔵される建曆二年十月二十七日慶政春秋二十五とある奥書のもの（野村八良博士説）と、建曆三年四月二十五歳写了的慶政自筆本の（中野慧達氏所報）、二書の内容を挙げ書名の判然としている前者をとり、文治四

年（一一八八）誕生説をとられている。（閑居友の作者成立及び素材について「日本佛教文学研究」）しかし、観智院にある「観自在王如来修行法」（慶政自筆本ではないが、この書が該当のものと思われる。）の本奥書は次のようになっており、前記二説はここから云われたようである。

建曆二年十月廿七日奉随宰相阿闍梨御房奉交之了、印悉可結之旨、蒙許可了

同三年四月一日賜御本書写之畢、願以此功德、臨欲命終時、必預迎弥陀往生安樂國

沙門慶政記之春秋廿五

即ち前二説のうち、建曆三年慶政廿五歳説が正しい。なお、旧九条家本「金堂本仏修治記」奥書に「文永四年十月十八日……相似沙門慶政生年七十九歳」とあつて文治五年誕生説と符号する。

注² 「大方広仏華嚴経」等の版心に「日本国僧慶政捨」とあつて、これらが慶政喜捨により刻板されたことがわかる。

注³ 真福寺蔵「続本朝往生伝」「拾遺往生伝」「後拾遺往生伝」「三外往生伝」。書陵部蔵「振鈴寺縁起」「関寺観音堂縁起」「諸山縁起」など。



